



新学習指導要領の全面实施と改訂の背景

新型コロナウイルス感染症による臨時休業等のインパクトが強すぎて、すっかりかすんでしまっていますが、本年度の4月から新しい学習指導要領が小学校で全面实施されました。

今回の学習指導要領は、これまでの学習指導要領とは趣を異にしています。これまでは各教科等が先に作られ、後から「総則」という全体にかかわるものが帽子のように載せられていました。今回は、総則についてまずしっかり議論が行われ、総則に沿って各教科等が作成されていきました。総則が先に示されるということは、進むべき方向が先に示され、その「しぼり」の中で各教科等が作成されるわけですから、今回の学習指導要領は、統一感のある仕上がりとなっているといっています。

新学習指導要領では、「外枠」が大きく変わりました。なんとといっても5、6年に外国語科が創設されたということが一番です。そして、外国語活動が3、4年にも。これによって、3年以上の授業時数が増加しました。週あたりで言うと2コマの増ということになります。その他、道徳の教科化やプログラミング学習の導入などが目を引きます。

しかし、今回の改訂で注目すべき点は、学びの質（学び方）に大きくこだわっていることです。身に付けるべき知識や技能はもちろんですが、どのように身に付けたかを重要視しています。その身に付け方は「主体的・対話的で深い学び」と表現されるとおり、学習を自分のこととしてとらえ、他の人たちと意見を交わし、自分と異なる考えを参考にしながら自身の学習をより深めていくといった学び方です。

学習指導要領改訂の背景として、子供たちが大人となり生きていく社会が想定されており、予測不能な社会、Society5.0、グローバル化、労働構造の変化などが挙げられています。予測不能な社会が到来することを予測するというのもおかしな話ですが、こういった社会をよりよく生き、幸せに生きるために、「知識及び技能」「思考力判断力・表現力等」「学びに向かい力や人間性」といった三つの資質・能力をバランスよく身に付けていくことが必要とされています。

予測不能な社会においては、どうすればよいかの答えは誰にもなく、よりよいであろう選択を導き出していくこととなります。こういった場合、知識を組み合わせたり多くの情報を集めて分析したりする主体性が必要であり、多くの人々の意見を聞き議論して、納得を得ながらよりよい選択をすることになるのです。前述した学び方「主体的・対話的で深い学び」の必要性に納得できます。

将来を見据えて

学校では、「主体的・対話的で深い学び」となるよう授業を工夫しています。将来の大人たち（今の子供たち）が予測不能な社会をたくましく生き、幸せな人生を送っていけるよう、将来を見据えて今を大切にしていきたいと思っています。（校長 上野 明彦）

